

栗東町埋蔵文化財発掘調査

1995年度 年 報



栗 東 町 教 育 委 員 会
(財)栗東町文化体育振興事業団

表紙の写真：辻遺跡 大型竪穴住居（上）

手原遺跡 掘立柱建物（下）

例 言

1. 本書は、財団法人栗東町文化体育振興事業団が受託した、1995年度埋蔵文化財発掘調査事業の概要と、栗東町教育委員会による国庫補助調査および町事業調査の概要である。
2. 調査にあたっては滋賀県教育委員会の指導助言を得て、栗東町教育委員会が主体となり財団法人栗東町文化体育振興事業団が実施した。尚、国庫補助調査および町事業調査は栗東町教育委員会が実施した。
3. 調査体制は以下のとおりである。

栗 東 町 教 育 委 員 会	社 会 教 育 課	課 長	乾 澤 亮
	文 化 財 保 護 係	係 長	奥 村 泰 祥
財団法人栗東町文化体育振興事業団	埋蔵文化財発掘調査課 調 査 係	主 査	清 水 好 洋 人
		主 事	松 本 正 三
		課 長	竹 村 利 隆 志
		係 長	大 崎 広 美
		主任技師	近 藤 智 樹
		技 師	雨 森 英 敏 一
			佐 伯 英 樹
			猿 向 敏 一
			藤 岡 英 礼

4. 本書の執筆は各調査担当者が行い、編集は執筆者の意向のもと雨森・佐伯が行った。
5. 調査内容中の調査地位置図は、スケールを指定しているもの以外はすべて5千分の1である。
6. 調査参加者

現 地 調 査 作 業	青 木 タキ子	池 田 清 子	石 原 恵 子	伊勢村 しずえ
	井 上 恵 子	井 上 妙 子	井 上 良 子	今 村 梅 子
	岩 倉 高 征	植 田 康 平	上 田 和 江	榎 戸 葉 津 子
	大 岡 道 代	太 田 好 枝	大 鳥 洋 巳	鹿 子 島 美 津 子
	川 崎 う た	川 辺 実 樹 子	木 下 政 子	久 徳 良 子
	教 野 妙 子	北 野 ふ み え	国 松 雅 宏	国 松 好 子
	駒 井 正 史	斉 藤 幸 美	清 水 宏 行	清 水 裕 一
	淡 江 享 一	園 田 菊 江	橘 徹	竹 村 ヒロ子
	千 代 清 美	塚 本 紀 代 美	塚 本 光 男	辻 井 一 二 美
	徳 住 映 子	徳 地 久 弥	富 田 由 美 子	中 川 義 信
	中 野 久 子	西 村 智 祐	西 岡 た よ 子	西 田 百 合 子
	牧 野 富 子	平 松 し ず 子	堀 部 ア キ 子	前 田 浩 尚
整 理 作 業	森 智 美 子	森 野 靖 子	横 山 こ と	渡 辺 薫
	岩 根 隆 子	大 橋 美 和 子	奥 村 美 枝 子	木 村 三 津 子
	穴 戸 貴 子	福 村 賀 世 子	藤 沢 静 子	宮 嶋 八 重 美
	山 田 真 弓			

目次

例言	1	⑧安養寺遺跡	34
目次	2	⑨手原遺跡	38
事業報告	3	⑩岩畑遺跡	42
遺跡位置図	5	⑪岩畑遺跡	43
調査の概要	8	⑫高野遺跡	44
受託事業一覧表	9	⑬辻 遺跡	45
①縄 遺跡	10	⑭辻 遺跡	46
②野尻遺跡	14	国庫補助事業・町事業一覧表	55
③野尻遺跡	18	⑮小柿遺跡	56
④野尻遺跡	24	⑯和田古墳群	57
⑤小柿遺跡	25	職員の活動記録	58
⑥伊勢遺跡	28		
⑦下鉤東遺跡	32		



発掘調査体験学習
(治田東小学校)
6年2組

1995年11月28日
辻遺跡(⑬)にて

事業報告

1. 発掘調査事業

今年度受託件数……………14件

国補・町事業への職員派遣数……2件



手原遺跡現地調査説明会

2. 普及・啓発事業

現地説明会

・手原遺跡

期日：9月9日(日) AM 10:00～

内容：奈良～平安時代の企画性がある

大規模な建物群の発見。

参加者：50名

・辻遺跡

期日：10月14日(土) PM 1:00～

内容：古墳時代の玉つくり工房・石銅

製作工房？の発見。

参加者：約100名



辻遺跡現地説明会

・辻遺跡

期日：3月23日(土) PM 2:00～

内容：県下最大級の大型竪穴住居と白玉入りのミニチュア埴による祭祀の発見。

参加者：約40名

遺物展示・展示説明会

・高野遺跡

期日（展示）：4月22日(土)～5月14日(日)

（展示説明会）：4月22日(土) PM 1:00～

場所：栗東歴史民俗博物館

内容：栗東町で最も古い遺構（縄文時代早期末～前期前半）から出土した、土器と木の実の展示と展示説明。

野尻遺跡小さな展覧会

期日：11月28日(火)～11月30日(木) AM 10:00～PM 4:00

会場：大宝公民館図書室

内容：栗東駅前土地区画整理事業に伴う野尻遺跡の5年間の発掘成果を展示。

参加者：約50名

埋蔵文化財ミニシンポジウム「大型建物の性格に迫るー下鉤遺跡と伊勢遺跡ー」

期日：12月10日(日) PM 1:00～4:00

会場：栗東歴史民俗博物館

講師：山崎秀二氏（守山市教育委員会文化財係長）

平井寿一・近藤広・佐伯英樹（財栗東町文化体育振興事業団）

松村浩（シンポジウム司会・栗東歴史民俗博物館）

内容：弥生時代、近江の「クニ」の中心であった野洲川流域の様相について、大型掘立柱建物の調査結果をふまえてのシンポジウム。

参加者：40名

発掘調査成果展（栗東歴史民俗博物館との共催）

期日：12月2日～1月15日



ミニシンポジウム



発掘調査成果展

会場：栗東歴史民俗博物館

内容：1994年度の主要な調査成果の展示。

参加者：1255名

発掘調査スライド報告会（栗東町教育委員会・

栗東歴史民俗博物館との共催）

期日：12月27日(金) PM 1:00～

参加者：24名

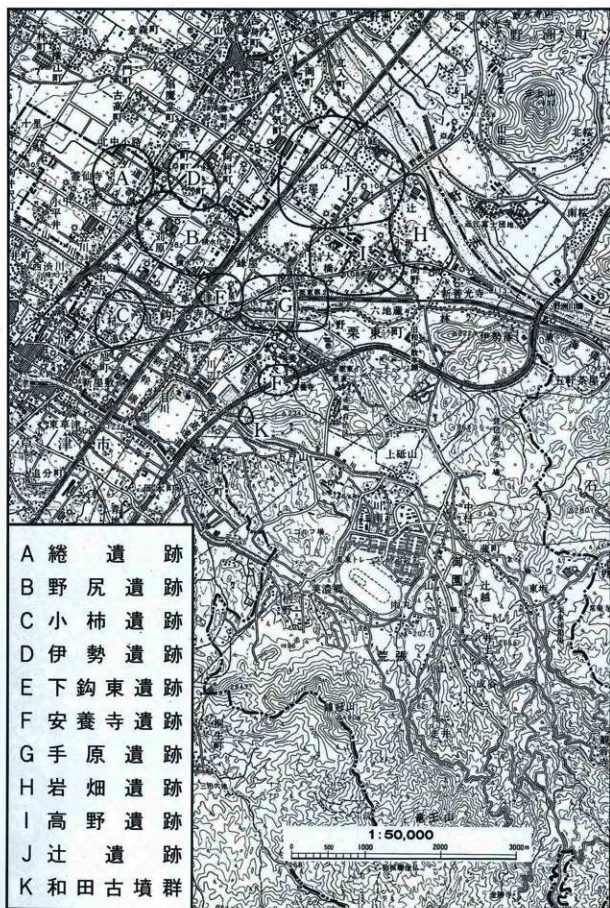
内容：1994年度の主要な調査成果の報告。

冊子等の発行

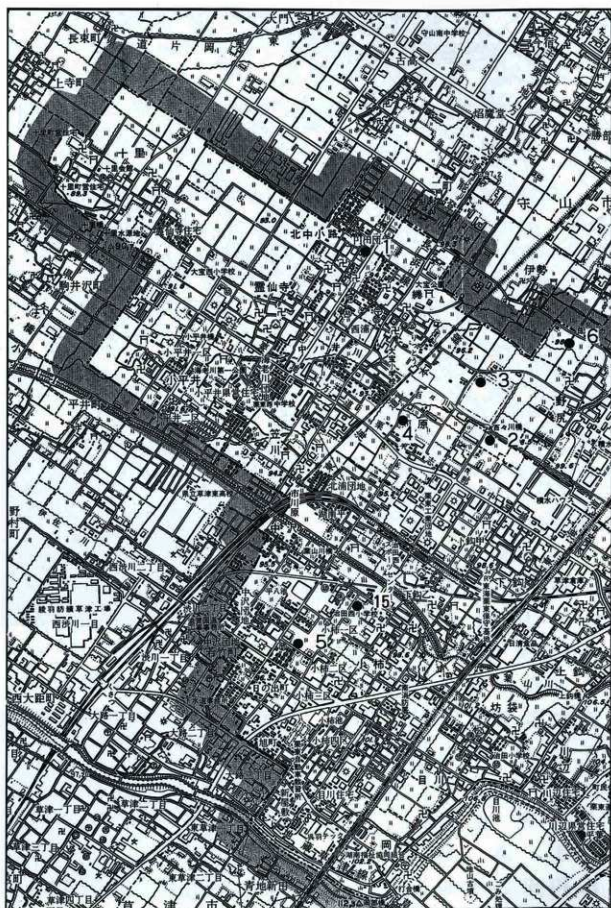
- ・栗東町埋蔵文化財発掘調査1994年度年報
- ・栗東町埋蔵文化財発掘調査1993・1994年度年報Ⅱ
- ・パンフレット「はっくつ'95」

部内研修「平安文化を訪ねて」

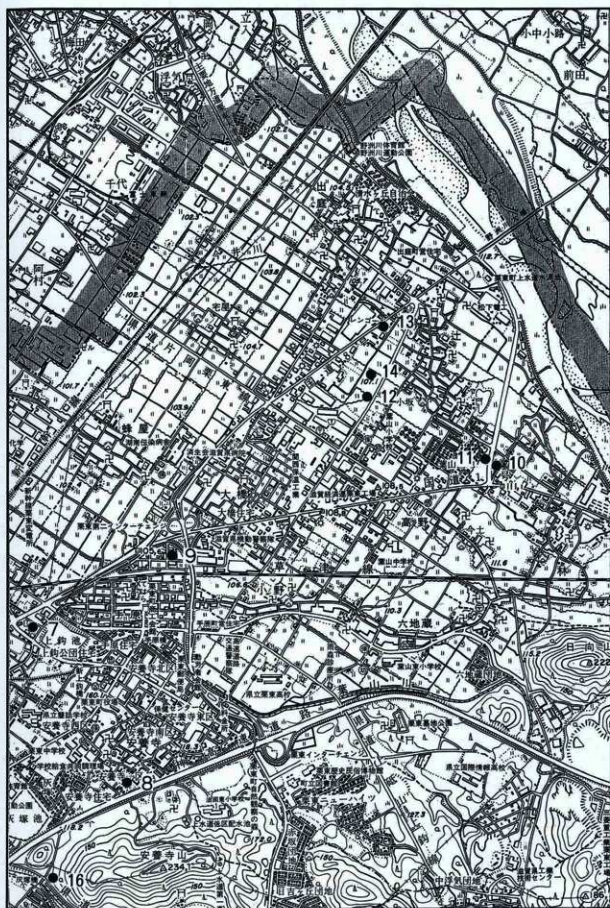
- ・期日：10月20日(金)
- ・行先：宇治市（平等院・宇治市歴史資料館）
- ・内容：埋蔵文化財調査作業員の研修
- ・参加者：34名



遺跡位置図



遺跡位置図 ① (1:20,000)



遺跡位置図 ② (1:20,000)

財団法人栗東町文化体育振興事業団 埋蔵文化財発掘調査

95年度受託事業調査一覧表

遺跡	調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
1 穂	北中小路字竹ノ花2-1の一部	宅地造成	掘立柱建物、土坑、溝、区画溝(鎌)	須恵器・土師器・黒色土器・輸入磁器・銭貨・漆器	10.13	猿向
2 野 尻	穂字下田101他	区画整理	大溝・柱穴・土坑(古)、溝、土坑(鎌)	須恵器・土師器・黒色土器	14.17	猿向
3 野 尻	穂字天堂53-3、60-1他	町民会館建設	溝(古・中・近)、掘立柱建物(中)、土坑、牛足跡	須恵器・土師器・黒色土器・灰釉陶器・磁器・銭貨	18.23	佐伯 猿向
4 野 尻	苅原字不老田446	宅地造成	溝(中)	中世須恵器・灰釉陶器	24	大崎
5 小 柿	小柿字垣之内428-1	共同住宅建設	掘立柱建物、土坑、溝(鎌)	土師器・黒色土器・瓦器・白磁・土鏝・石鏝	25.27	雨森
6 伊 勢	野尻地先	道路新設改良	河川(弥・古)	弥生土器・鉄・建築部材・須恵器・土師器・陶器	28.31	佐伯
7 下 鉤 東	上鉤字上教田171-1、178	事務所及び寮	掘立柱建物(奈・平)、井戸・溝(近)	須恵器・土師器・灰釉陶器・緑釉陶器	32.33	藤岡
8 安 養 寺	安養寺5丁目字山寺屋敷735他	宅地造成	竪穴住居(古・飛)、掘立柱建物(奈・中)、土坑・溝(中)	石鏝・須恵器・土師器・陶硯・陶磁器・瓦・石臼・鉄釘	34.37	佐伯
9 手 原	手原7丁目820	貸倉庫建設	掘立柱建物・井戸・土坑溝・櫓列	須恵器・土師器・黒色土器・白磁・土鏝	38.41	雨森
10 岩 畑	林字高丸310-3	宅地造成	竪穴住居・土坑溝(古)	古式土師器・砥石・鉄鏝・白玉	42	大崎
11 岩 畑	林字高丸310-1、312-1	造成工事	流路(古・中)	古式土師器・土師器・黒色土器	43	大崎
12 高 野	高野621-1他	共同住宅建設	流路(古・中)・井戸・土坑(近)	須恵器・土師器・泥めんこ・鋳造関連遺物	44	雨森
13 辻	辻字北ヶ塚526-1	店舗建設	竪穴住居(古)・スラッグ焼土廃棄場(近)	古式土師器・滑石製品	45	大崎
14 辻	辻地先	区画整理	竪穴住居(縄・古)、掘立柱建物(縄・近)玉造工房、土坑、ビット、溝、流路、土器溜まり	須恵器・土師器・黒色土器・緑釉陶器・石鏝・石鏝・縄文土器・玉造関連遺物(玉砥石・未製品)	46.53	近藤

遺構では、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

① 縄 遺 跡

調 査 地 栗東町大字北中小路字竹ノ花2-1

調査期間 1995年8月7日～1995年8月31日

調査面積 175㎡



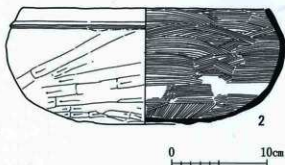
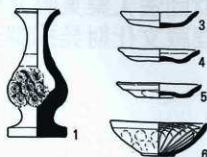
調査地位置図

縄遺跡は、旧野洲川と現草津川が形成した複合扇状地の扇端に位置する。

過去の調査からは、弥生時代から近世期にわたる遺構・遺物が確認されている。しかし、調査成果から遺跡の様相は、本質的に2つに分けることができる。つまり、遺跡の北半地区に広がる弥生時代の方形周溝墓群を形成する弥生遺跡の一面、そして、南半地区に広がる奈良時代から近世期にわたる集落跡としての一面である。この集落跡については、歴史的には概ね12世紀から14世紀が、その中心となすことが判明している。

今回の調査地は、中世期の遺構群が集中する遺跡の南半地区であり、13世紀から14世紀の屋敷跡を検出した94年度調査地と南接する。

内容的には、設計変更による調査対象地の拡張部分となることから、94年度の調査成果を述べながら、今回の調査についてその概要を報告することとする。



94年度調査出土土器実測図

1・2 SD01

3～6 SE04

94年度調査の概要 前述のように、94年度調査では、13世紀後半と14世紀の2時期の屋敷跡の変遷を確認することができた。

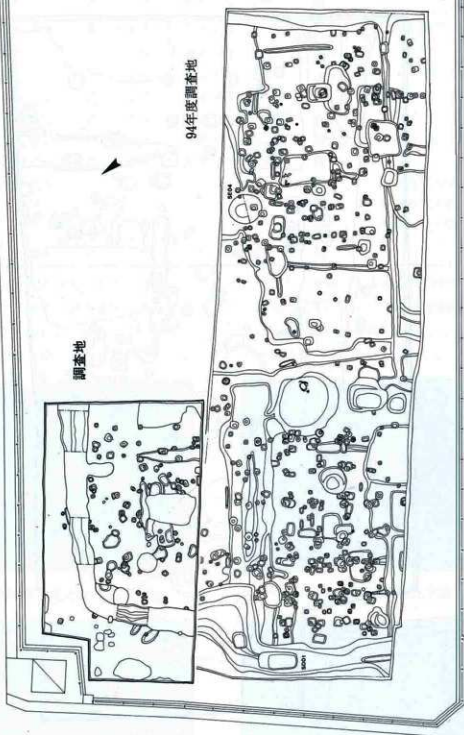
13世紀後半には、小規模な溝と幅5m程の空閑地によって区画された東・西群に分かれていた屋敷の敷地が、14世紀になると新たな大溝によって、4棟で構成する1区画に再編されたことが判明した。

遺構・遺物 今回の調査は先に触れたように、94年度調査の北拡張部といえ、状況的にその内容は大きくは変わらない。

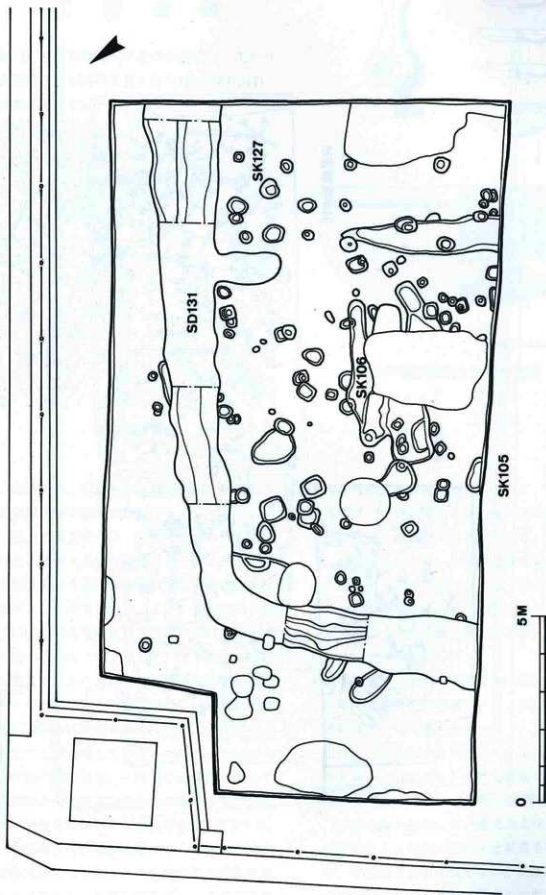
SD131 検出長20m・幅0.9～2m・深さ0.3m程を測る大溝である。94年度調査で確認したSD01の延長部分で、14世紀の区画溝である。

区画された内部には、埋土および遺構の重複関係から2時期の柱穴・土坑群を確認したが、有機的な様相は窺えない。状況的に、94年度調査で確認された屋敷内の前庭部と理解してよいだろう。

農業用水路



トレンヂ位置図



遺構平面図

出土銭貨一覧表

遺構番号	名 称	書 体	初 鑄 年	素 材	備 考
S K 105	開元通宝		唐 武徳 4 年 (621)	銅	
	明道元宝	篆	北宋 明道元年 (1032)	銅	
	紹聖元宝	篆	北宋 紹聖元年 (1094)	銅	
S K 106	皇宋通宝	篆	北宋 宝元 2 年 (1039)	銅	不明 3 枚が錆びついて出土
S K 127	明道元宝	真	北宋 明道元年 (1032)	銅	
	嘉祐元宝	真	北宋 嘉祐元年 (1056)	銅	
	熙寧元宝	真	北宋 熙寧元年 (1068)	銅	
	熙寧元宝	篆	北宋 熙寧元年 (1068)	銅	
	元豊通宝	真	北宋 元豊元年 (1078)	銅	
	紹聖元宝	真	北宋 紹聖元年 (1094)	銅	
	〇〇元宝			銅	小破片化の為不明
	不明			銅	小破片化の為不明
	不明			銅	小破片化の為不明
S D 131	皇宋通宝	真	北宋 宝元 2 年 (1039)	銅	

まとめ 表は、今回の調査で出土した銭貨の一覧表である。中世期の集落遺跡において、一般的に認められる銭貨の種類を示すものの、ここでは屋敷存続時期のものが欠如している。

つまり、銭貨による本遺構の年代の上限は 12 世紀初頭といえる。今回は前庭部と理解したが、この時期の遺構が重複している可能性も今後注意しなければならない。(猿向)



遺構検出状況 (南から)



S K 127 銭貨出土状況



遺構完掘状況 (南から)



S D 131 漆膜出土状況

② 野 尻 遺 跡

調査地 栗東町大字穂字下田101地

調査期間 1995年4月3日～1995年9月30日

調査面積 817㎡

野尻遺跡は、標高1,200m程の鈴鹿山系から源を発し琵琶湖へ西流する旧野洲川が形成した標高100m程を測る扇状地の扇端と氾濫源との境に位置する。

過去の調査成果からは、縄文時代後期から近世期にいたる遺構・遺物を確認しているが、その中心は弥生時代末から古墳時代初め、および平安時代末から鎌倉時代前半の2時期にあることが判明している。

88年度の調査では、一辺50mの方形溝で区画された古墳時代の居館跡を発見し、当時の豪族を知る上で貴重な知見を得た。また、93・94年度では、弥生時代後期の大集落である守山市の伊勢遺跡に北接する地区で、入母屋造りの大型建物などを発見している。

今回の調査は、JR東海道本線栗東駅前土地区画整理事業の第七期工事に伴う発掘調査である。今年度は94年度に引き続き、保有地および水路部分であり、約1,400㎡がその対象となった。

ここでは、94年度調査の遺構の東側延長部分を検出した水路部分の調査について、その概要を報告することとする。

層序 調査地で認められる基本的な層序は、上層から、層厚20cm程の現代耕作土層、中世期の遺物を包含する層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、中世期以降の遺構面である層厚15cm程の黄灰色系粘質土の盛土層、そして古墳時代の遺構面である黄褐色系粘質土層の地山層である。

遺構・遺物 検出した遺構には、古墳時代の用水路・柱穴・土坑・溝および、鎌倉時代の土坑・溝などがある。遺物には、須恵器・土師器・黒色土器などがある。量的には8割程が古墳時代後期の須恵器・土師器類である。



調査地位置図

(上層遺構)

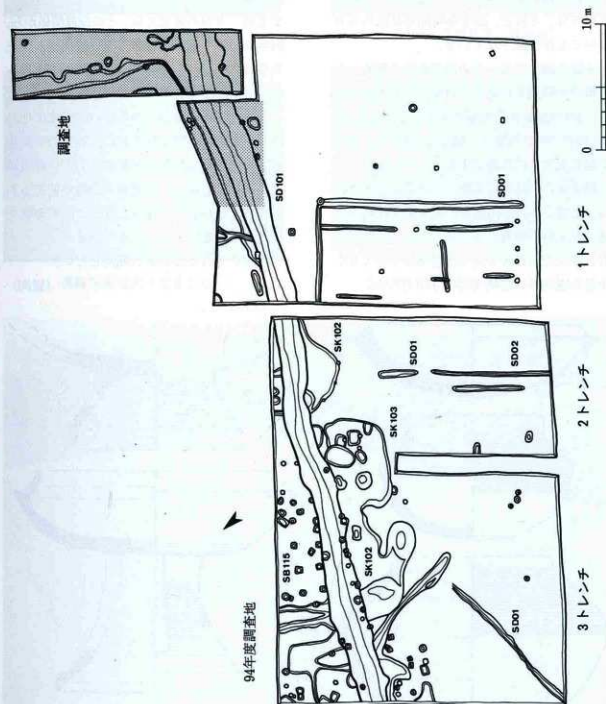
中世期以降の遺構は、灰色系砂質土・粘土を埋土とするもので、そのほとんどが著しく削平をうけており、深さは0.1m程度以下とその遺存状況は悪い。

内容的には、中世土器細片が少量出土する土坑・柱穴・溝などがある。

SK02 東西0.8m・南北1.1m・深さ5cm程を測る土坑である。

SD04 幅0.2~0.7m・検出長2m・深さ0.5m程を測る溝である。

トレンチ北側の柱穴は径0.4~0.5m・深さ0.1m程を測る円形掘方である。埋土は、暗灰色粘土である。近世期のものである。



遺構平面図

(下層遺構)

94年度の調査では、遺構の重複関係および土層層序により、古墳時代後期に2時期が認められた。大溝SD101を主体にそれに伴う溝・柱穴群からなる一群と、それらより古い掘立柱建物SB115とそれに付属する土坑・柱穴群の一群である。また、主要な遺構の出土土器の検討からは、2つの遺構群の時期については、さほど、顕著な時間差は認められないことが確認されている。

今回の調査では、その調査範囲の制約から遺構での時期差は認められなかったものの、SD101の延長部分を確認することができた。SD101 検出長14m・幅3m・深さ0.8m程を測る東西方向の溝である。

埋土は、大局的に3層に分けることができる。上層から、灰褐色系砂質土およびシルト層、暗灰色系粘質シルト層、そして、鉄分を含む茶灰色系砂層である。遺物は主として、中層の廃絶時の堆積土層より出土した。

SD101は、総検出長は55mに及ぶもので、依然東側に延びる。状況的に農業用水路としての性格を担っていたものと思われる。

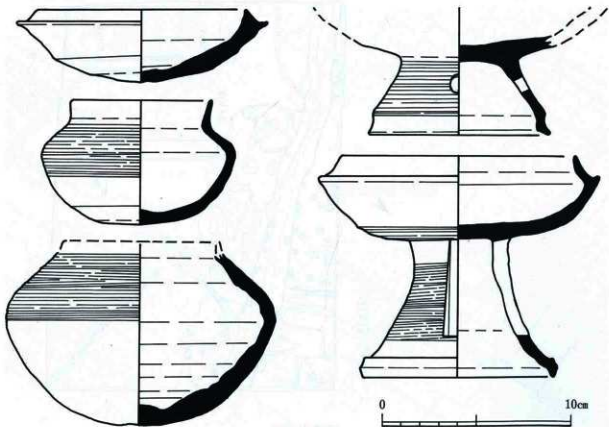
SD103 検出長20m・幅0.2~1.7m・深さ0.1~0.3m程を測る南北方向の溝である。北側より緩やかに流れてきたものが、SD101の直前で急に狭まり、流れを西に変えSD101に接続する。

まとめ 今回の調査では、その位置関係から、94年度調査で確認された古墳時代後期6世紀後半頃を中心とした様相を示す調査結果となった。

しかし、野尻遺跡での近年の調査成果からは、旧野洲川の微高地にあたる地区での調査が進むにつれて、遺跡北側の守山市伊勢遺跡との関係も示唆される遺構・遺物が確認されるなど、これまでと違った遺跡に対する新たな評価が、必要になってきている。

今後のさらなる成果に期待したい。

(猿向)



土器実測図



遺構検出状況（北東から）



SD101 完掘状況（東から）



遺構完掘状況（北東から）



SD101 遺物出土状況（北から）



94年度調査地完掘状況（東から）

③ 野尻遺跡

調査地 栗東町大字純字天堂、字丁子
調査期間 1995年11月21日～1996年3月8日
調査面積 1700㎡

野尻遺跡は野洲川が形成した沖積低地の標高96～99mに立地する遺跡で、これまでにJR東海道本線栗東駅前区画整理事業にともない広範囲に調査が実施されていて、遺跡の内容も徐々に明らかとなってきた。

野尻遺跡の北側に接して存在する伊勢遺跡は守山市伊勢町を中心に弥生時代後期の大集落を展開させていて、大型掘立柱建物群の発見などで近年特に注目されている。一方野尻遺跡の南側ではやはり弥生時代後期の大型掘立柱建物が確認された下鈎遺跡が存在している。

今回の調査地を含め、野尻遺跡は伊勢遺跡、下鈎遺跡が立地する微高地の間にあり、低地という土地条件から主に水田などが営まれていたようであるが、方形周溝墓や古墳時代、

中世の掘立柱建物も検出例は少ないが確認されている。

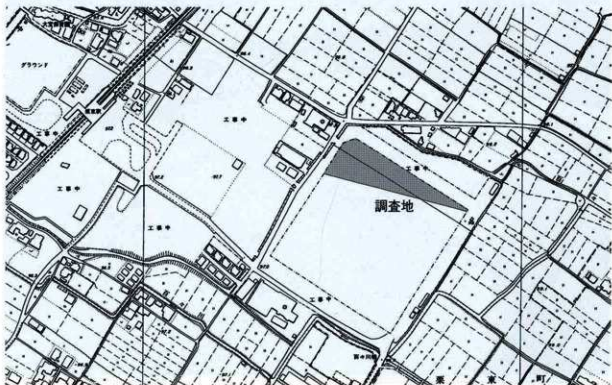
本調査は(仮称)栗東町民会館建設に先立ち実施した。36,205㎡の工場跡地のうち遺構の存在しない砂礫面を避けた約5,000㎡の調査対象地で、工事基礎等の攪乱部分を除き、7カ所にトレンチを設定して調査を実施した。

基本層序は上層から40～50cmの工場盛土、約20cmの近現代耕作土、10cm前後の灰色粘質土、そして黄灰色粘質土の遺構検出面の地山に至る。

検出した遺構は土坑数基、中世の掘立柱建物1棟、古墳時代の溝1条、中世～近世の溝多数である。

溝群は農耕用水路という性格上から良好な遺物に恵まれなかったが、灰色系埋土で栗太郡主条里(地割のラインが南北から約30°東に傾いた方向をとる)のものと、茶褐色系埋土で南北方向に流れるものがあり、前者は平安時代以降、後者は奈良時代以前である。

以下トレンチごとに概略を述べる事とする。



調査地位置図

T-1 長さ約30mのトレンチに直行する形で溝が20条確認された。溝の切り合いは少なく灰色系の埋土もほぼ同様である。

SD01は調査区最大の溝で、幅6m、深さ1.5m、中世から工場建設以前まで用水路として連続して機能していた。SD02からSD07は幅約1.5m、深さ約0.5mと比較的中規模で、SD08からSD19は幅0.6m、深さ0.2m以内で小規模な溝である。SD20は中規模の溝で、T-2のSD31に対応するもので、この溝より北東には溝群は検出されない。これらの溝群は条里型地割の坪割線に一致はしないが、地形上の利有からこの位置に用水路が掘削されたのであろう。

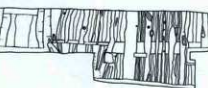
T-2 T-1から連続する溝群を検出した。調査区南東端ではこれらの溝と直行する溝群があり、SD13もここで直行方向の溝に合流している。この位置は坪割線と一致する場所である。SD31からは1068年初鑄の北宋銭「熙寧元宝」が出土している。

T-3 図示していないが土地改良の為に削平された古墳時代後期頃の溝の一部が確認された。

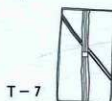
T-4 南北方向にやや弧を描くように掘削された溝群であるが、埋土は灰色系のものであり、平安時代以降の用水路である。

T-6 溝1条、掘立柱建物、風倒木痕跡、耕作痕跡を確認した。掘立柱建物の規模は現状で3×2間、柱穴径30~50cm、深さ40~50cm、柱痕跡は15~20cmである。柱間距離は長辺側で2.2m、短辺側で2.5mである。出土遺物は柱痕跡部分から12~13世紀の土師皿が出土した。建物の横を流れるSD50と供に条里方向に軸をとる。なおSD50の底部およびT-2からは動物の足跡が確認された。

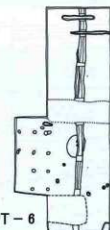
以上簡単に各トレンチの調査結果を述べた。掘立柱建物が1棟検出されたが、用水路の状況からこの周辺一帯が主に耕作地であった事が窺える。



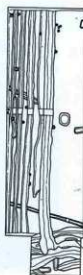
T-1



T-7



T-6



T-2



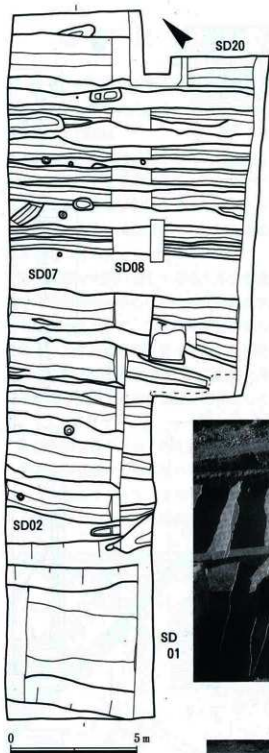
T-5



T-4

0 10 20 m

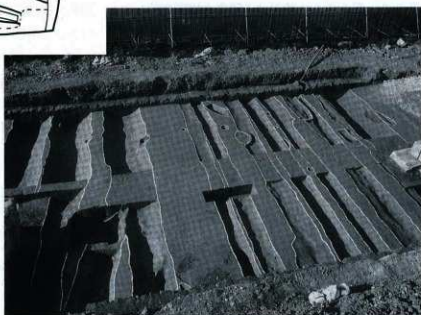
トレンチ配置図



T-1 遺構図



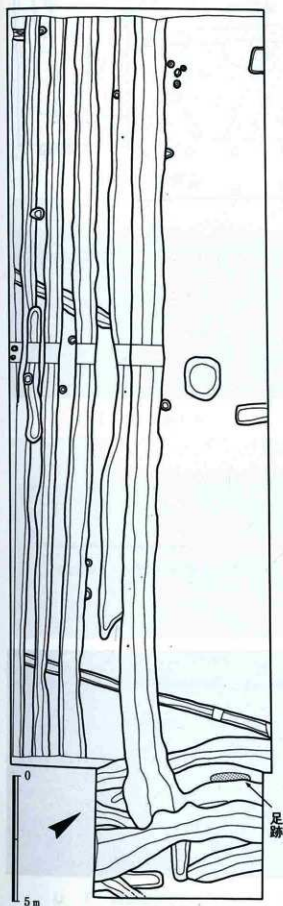
遺構検出状況



遺構掘削状況（南から見る）



SD07 断面（北壁）



遺構検出状況



遺構完掘状況

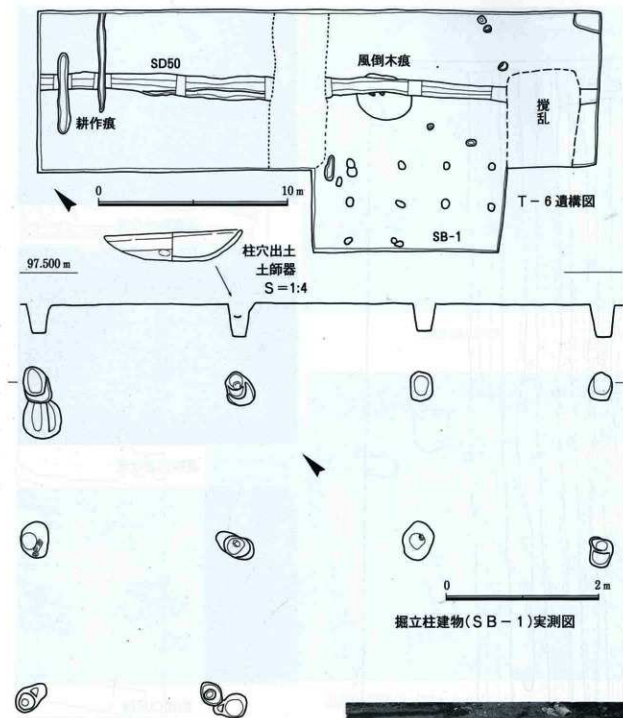


動物の足跡



動物足跡

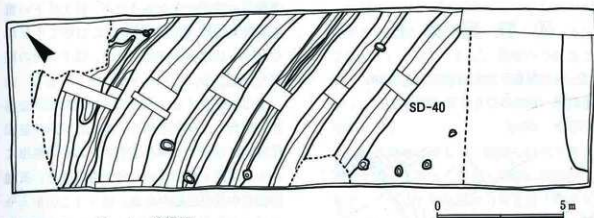
◀ T-2 遺構図



土師皿出土状況



掘立柱建物



T-4 遺構図



T-4 完掘状況



T-4 溝SD-40断面



T-5 遺構検出状況



T-3 土地改良痕跡



T-7 遺構完掘状況



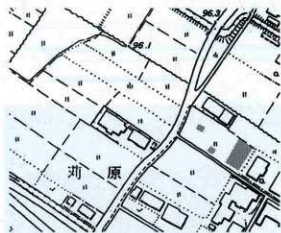
T-7 溝北壁断面

④ 野 尻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字刈原字不老田446

調査期間 1995年12月11日～12月21日

調査面積 180㎡



調査地位置図(2500分の1)

野尻遺跡は、縄文時代晩期以降、様々な時代の遺構・遺物を遺す複合遺跡として周知されている。JR栗東駅前の区画整理事業に伴う調査によりその広がりや内容が次第に明らかになってきている。特に弥生時代について見れば、野洲川流域における弥生時代後期中核的な遺跡である伊勢遺跡と葉山川流域における当該期の拠点集落である下鈎遺跡に挟まれた河道沿いの低湿地の状況やその自然環境を知る上で興味深い遺跡である。

今回の調査地は野尻遺跡では南端に近い区域、下鈎遺跡よりの地点である。弥生時代の

遺構等は確認できなかったが、耕土直下の黄灰色層土（標高：95.80m）において中世溝やピット状遺構が確認された。以下にその概略を記述する。

溝は、幅員1m、深さ0.3mを測り、L字形に屈折し、現状地割りに並行して延びる。屋敷地を区画する溝と推察されるが、建物については捉えていない。出土物には、灰釉陶器や中世須恵器がある。

ピット状遺構は、径0.5～1mの不整円形状を呈するが、明確に柱穴を持つものはない。

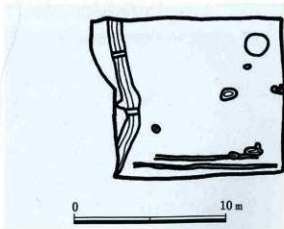
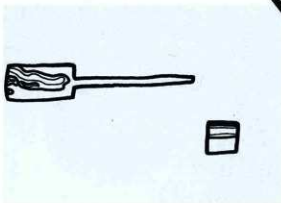
土坑状遺構は、幅員1m、深さ0.3mを測り、略東西方向に延びる。明瞭な建物の出土はなく、性格は不明である。

その他、近世以降の円形状の掘り込みも確認されているが、性格はやはり不明である。

(大崎)



中世溝



遺構掘り込み状況（溝）

⑤ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字小柿428-1

調査期間 1995年5月9日～6月16日

調査面積 330㎡

小柿遺跡は、葉山川左岸に位置しており、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物がみつかるとして知られている。今回の調査地は遺跡のなかでも西半部にあたり、これまでの付近における調査では、古墳時代の周溝状遺構等がみつかった。

今回の調査では、12世紀から13世紀にかけての掘立柱建物群、およびそれに関連していたと考えられる溝・井戸・土坑などがみついている。これらの遺構は、建物方位・重複の状況・溝との位置関係等からⅠ-a・Ⅰ-b期、Ⅱ期にわけることができる。

Ⅰ-a期には調査区中央に7間×3間の総柱建物（SB-1）がみられる。柱間距離には2.1～3.1mとばらつきがあり、あるいは二棟が並列する形をとる可能性ものこされている。SB-1との位置関係からSD-2およびSD-150が区画溝として機能していたことが考えられる。またこれにSX-164、SX-122の方形土坑が付随していた可能性がある。SX164は溝とつながっており、洗い場等の作業場であったと考えられる。

Ⅰ-b期では建物規模が比較的小さく、5間×2間の掘立柱建物（SB-2）がみられる。SB-3はこれの建て替えであろう。北の区画溝はSD-5であったと考えられ、屋敷地も小さめとなっている。

Ⅰ-a期とⅠ-b期の先後関係は、上述の建物間に切り合いがなく明確ではないが、SB-3と、これと棟方位及び柱筋を揃えたSB-4を同時期のものとする、SX-122との切り合いにより、Ⅰ-b期が後の時期になることになる。Ⅰ期の後の時期には、素掘りの井戸（SE-213）が伴う。

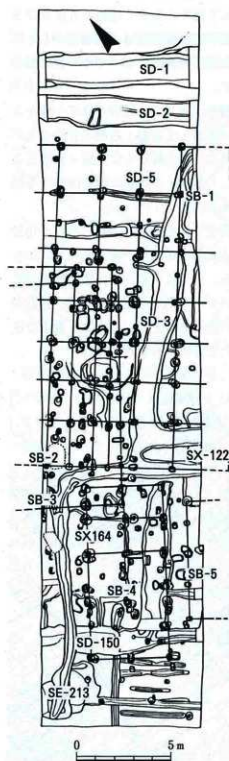
Ⅱ期になると、区画溝としてSD-3が形成される。掘立柱建物（SB-5）は、SB-3に囲まれて建てられる。建物の方位及びSB-3南西半部の軸方位は、現地割のもとになっている条里地割にくらべてやや西に振る方向を示す。

Ⅰ・Ⅱ期をつうじて、建物の柱穴や溝から黒色土器・瓦器・土師器・白磁・青磁などが出土している。包含層からは土鍾・軒平瓦なども出土しており、その量は調査区南西半部で顕著である。

今回の調査では小柿遺跡における12～13世紀にわたる集落の状況の一端が明らかになったといえる。とくにSB-1は建物規模がとくに大きいものである可能性が高く、付近の中世集落の性格を考えていく上で、貴重な成果となったと考えられる。（雨森）



調査地位置図



調査地遺構図



調査区検出状況（南から）



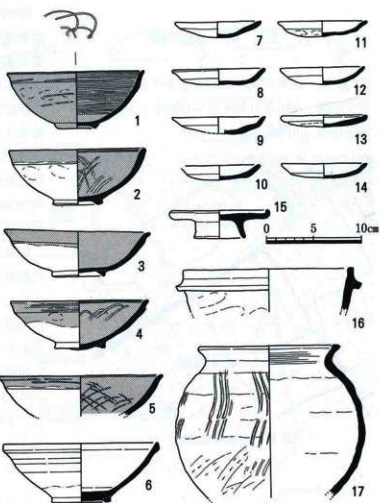
調査区完掘状況（南から）



作業風景



SD-1・2



遺物実測図

(1、2、7
3～6、8、10～15、17
9、12

SX-164出土
SX-34出土
SD-3出土



調査区全景写真

⑥ 伊勢遺跡

調査地 栗東町大字野尻字上大平田

調査期間 1995年11月6日～1996年1月20日

調査面積 100㎡



図1 調査地位置図

野洲川左岸沖積平野の微高地上に立地する伊勢遺跡では、これまでに主に守山市側で調査が実施されていて、縄文時代後期から近世に至る遺跡であることが確認されている。

特に弥生時代後期には大型掘立柱建物群が存在するなど傑出した内容を備えた集落であることが判明している。その弥生時代後期の居住域は守山市伊勢町の現集落を中心に東西約700m、南北400mに推定され、一部栗東町大字野尻（野尻地区）にも及んでいる。

野尻地区では1994年の調査で3×1間で屋内棟持柱を持つ大型掘立柱建物や居住域南東を限る河川跡を検出した。今回の調査はその河川跡の西側下流部分を約100㎡の面積で実施した。

川幅は約7～8m、深さ1m、現地表面からは1.3mである。堆積土層は上層の粘質土層、下層の砂礫層、スクモ層に大別され、上層からは中世から古墳時代前期の遺物が出土

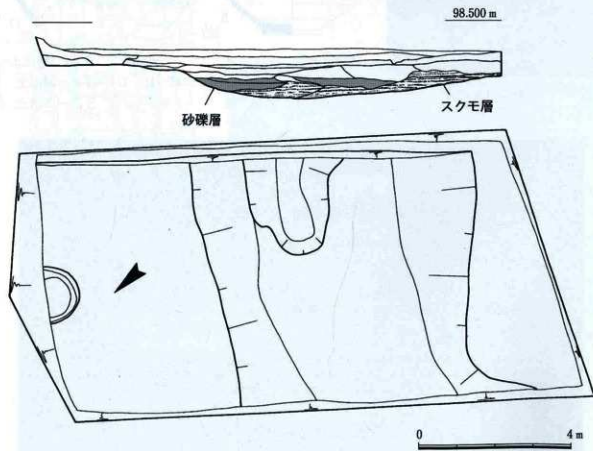


図2 遺構全体図

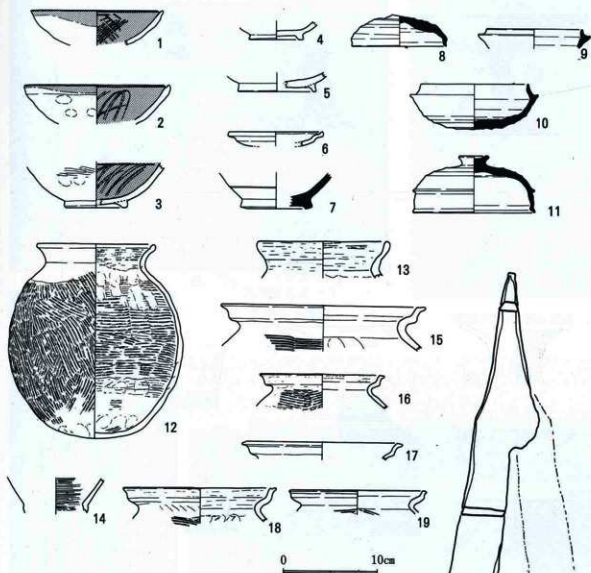
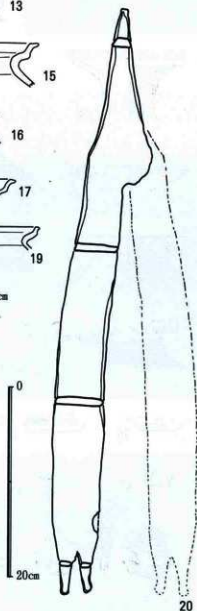


図3 上層出土遺物実測図

し、下層からは弥生時代後期の土器、木製品が出土した。木製品は建築部材の他、直柄横鋏や曲柄又鋏などの農具が出土した。曲柄又鋏（図3-20）は長さ62cm、厚さ0.7~0.8cmで、刃部先端を2又に加工している。また、図4-45の木製品は長さ2.4mの棒状で、中央部の一方を山形に、その裏面を平坦に仕上げている。先端部等に顕著な磨耗痕跡は見られず、用途は不明だが、縦向遺跡等に出土例のある天秤棒に似ている。

本調査では面積は狭いものの比較的まとまった遺物が出土しており、伊勢遺跡の居住域を推定する上でも成果を得たといえる。

（佐伯）



下層出土曲柄又鋏

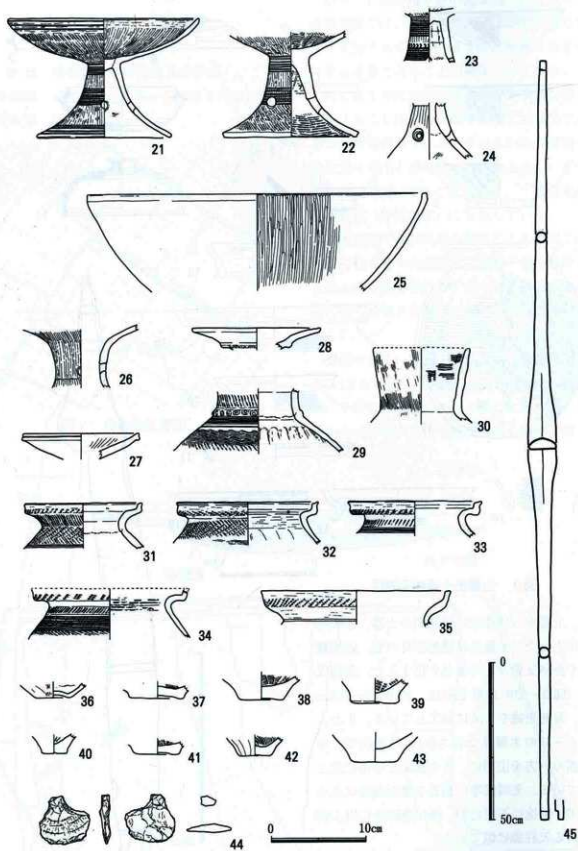


图4 下層出土遺物実測図



河川跡SR-3
北側から撮影



不明木製品出土状況



曲柄又鍬出土状況



SR-3 東側断面



弥生土器高杯出土状況



土師器甕出土状況

⑦ 下 鈎 東 遺 跡

調 査 地：栗東町大字上鈎上教田172-1178

調査期間：1996年1月30日～3月31日

調査面積：620㎡



調査地位置図

下鈎東遺跡は、弥生時代から室町時代の複合遺跡であり、奈良時代と室町時代が遺構の主流となる。過去の調査は上鈎遺跡に接した遺跡範囲の北側が中心で、奈良時代の掘立柱建物が散在的に確認されている。本調査地は遺跡範囲の中でも、官衙とされる手原遺跡に西接しており、その関連が注目された。

層序 確認した基本層序は上層から順に、層厚0.2mの灰褐色系粘質土（耕土）、近世の遺構が存在する層厚0.3mの黄色系粘質土、古代遺跡の地山となる茶褐色系粘質土である。

茶褐色系粘質土より検出した遺構は、古代の柱穴・溝と近世の井戸（SE-1）・小溝（SD-3）である。以下、主要遺構について



調査地全景

で概述する。

SD-1 幅約1.5m、深さ約0.5mを測る。9世紀代の須恵器の出土を見た。

SA-1 6間以上と思われる櫓列である。本調査地に於いて、磁北に近い角度を呈するのはこの遺構のみである。重複関係によりSD-1に先行し、本調査地の中では最も古い遺構となる。

SB-1 3×5間の掘立柱建物であり、北西側に庇を持つ。検出した掘立柱建物の中では最大規模である。重複関係により、SB-2に後出する。

SB-3 重複関係によりSB-2に先行する。9世紀代の須恵器の鉢が出土している。

SW-1 深さ約0.2mの落ち込みで、基底部からは8～10世紀代の須恵器等が出土した。古代遺構の中では最も新しい時期に属する。

出土遺物 量的には少ないが、布目瓦を見る等、手原遺跡との共通点を伺うことができる。

遺物の種類は須恵器・土師器・灰釉・緑釉陶器等があり、8～11世紀代に収まるが、8世紀代の遺物はあまり見られず、9・10世紀代の点数が多いのが特徴である。

まとめ 当調査地は手原遺跡と共通する点が多いが、手原遺跡の遺物の主流が8世紀代であるのに対し、9～10世紀が主流となっている。これは9世紀頃から見られる手原遺跡の官衙的な遺構の拡散と対応すると思われるが、その範囲確認も含めて今後の調査に期待したい。

(藤岡)



SB-1 (南より)

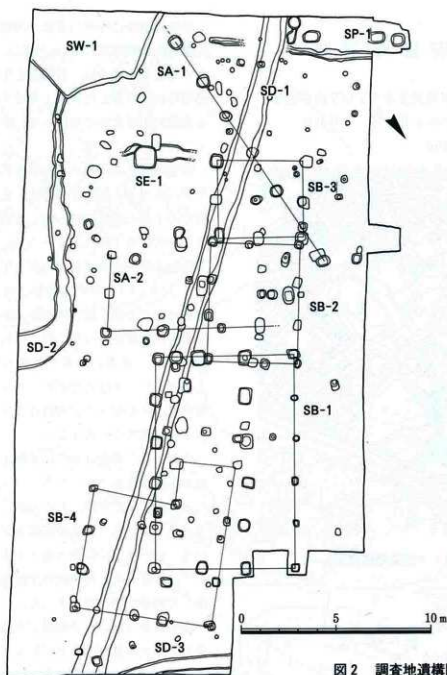


図2 調査地遺構図

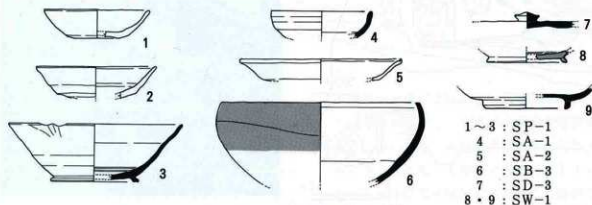


図3 出土遺物実測図 (S=1/4)

⑧ 安養寺遺跡

調査地 栗東町安養寺5丁目山寺屋敷

調査期間 1995年5月8日～7月31日

調査面積 1200㎡



図1 調査地位置図

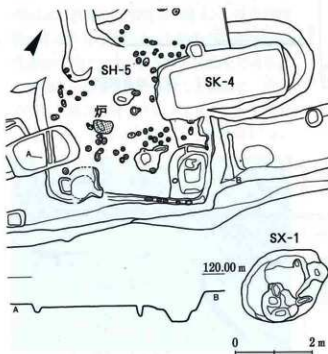


図2 竪穴住居SH-5 平面・断面図

安養寺遺跡は野洲川左岸の沖積平野を望む安養寺山北麓標高約116m～211mに位置する。この安養寺山麓では、名神高速道路建設の際、初期馬具を副葬した新開1号墳をはじめとする複数の中期古墳が発掘され、安養寺古墳群として知られている。

調査地はそのうちの山寺屋敷古墳に接した位置にあたる。調査区は溜池を挟み上段と下段で約5mの高低差がある。遺構は4世紀後半の竪穴住居1棟（SH-5）、土坑1基、7世紀末から8世紀初頭の竪穴住居3棟（SH-2・3・4）、掘立柱建物3棟、13世紀から16世紀の土坑、掘立柱建物、溝を検出した。

布留式新段階並行期の竪穴住居SH-5は一辺4.5m、東端に貯蔵穴と思われる方形の土坑を持つ。主柱穴は認められないが、床と壁溝内には小ピットが多数存在する。土器類は主に貯蔵穴から出土した。

SH-5の東側2mには直径2m、深さ25cmの土坑が存在する（SX-1）。木の根のためその形態は判然としないが、不定形に掘り込まれている。土坑の底部などは焼けてはいないが、埋土には炭と焼土が多く含まれていて、SH-5と同時期の土器類と共に、炭化した桃核が25点程出土した。

布留式並行期には沖積地に岩畑・高野・辻遺跡の3大集落が営まれているが、墓域である丘陵地からの住居跡の発見は初例であり、焼土土坑とともに興味深い事例である。



SH-5を南西から見る

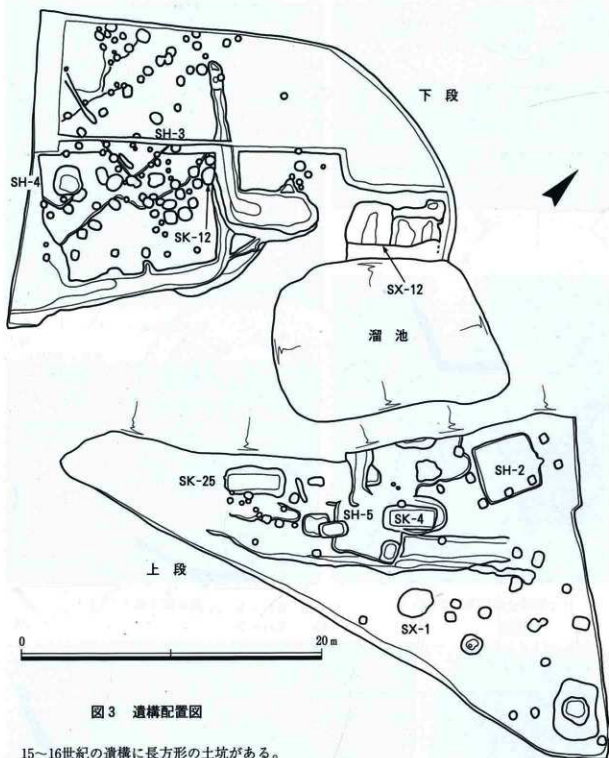


図3 遺構配置図

15～16世紀の遺構に長方形の土坑がある。SK-4・25で、ともに長辺4m、短辺2m、深さ1.3mの規模で、木棺痕跡等認められず、性格は不明である。SK-4の底部からは仏具と思われる小型の銅製椀(図4-19)が出土した。SK-25は北東側から流れ込むような形で炭・焼土と多量の鉄製品が堆積していた。鉄製品の大半は使用済の鉄釘のようである。その他、青磁器や香炉、漆器椀が出土し

た。

調査地の東には1487年に足利義尚が布陣した安養寺が所在し、当地は小字山寺屋敷であることから、その塔頭の存在が考えられ、これらの土坑の他に五輪塔や瓦が出土している事からも寺院関連施設が存在した可能性は高い。(佐伯)

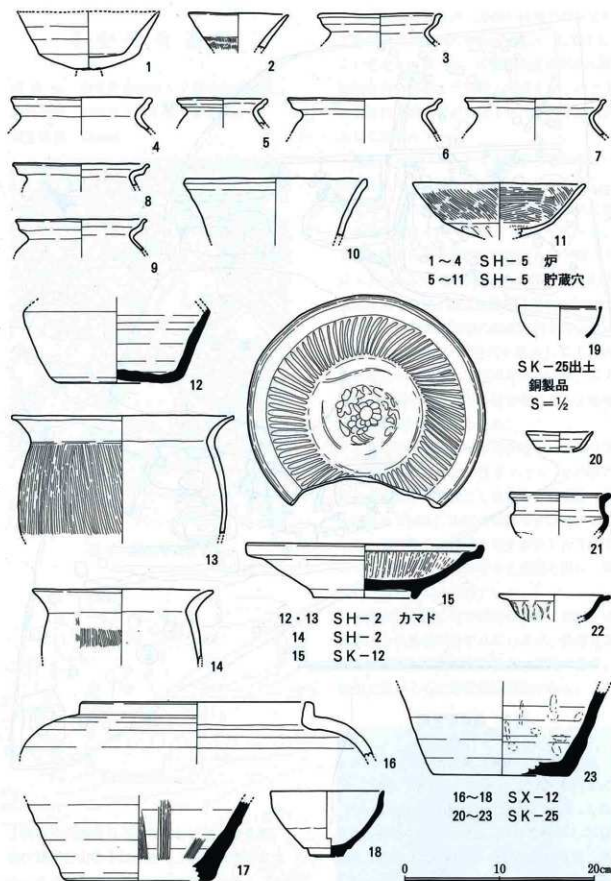


図4 出土遺物実測図 S = 1/4



上段完掘状況



SX-1



下段完掘状況



SX-12 石臼出土状況



SK-25 炭層立ち割り



SK-25 出土鉄製品

⑨ 手原遺跡

調査地 栗太郡栗東町手原7丁目820

調査期間 1995年7月10日～10月17日

調査面積 856㎡

手原遺跡の周辺では正南北方向の地割がのこり、また古瓦が散布していることが、従来より知られてきた。発掘調査では、古代から中世におよぶ、多数の掘立柱建物が発出され、なかでも奈良～平安時代の企画性がある総柱建物群が目される。

今回の調査は、従来から総柱建物群のみつがっていた地点の北側に隣接する調査区で実施された。検出された遺構には奈良時代後半を中心とする時期の掘立柱建物・櫓（塀）・土坑・井戸、平安時代～中世の掘立柱建物・溝・土坑などがある。このうち奈良時代後半を中心とする時期の遺構群は、規模が大きく、企画性が考えられるものである。

SB-1は、7間以上×2間の東西棟である。SB-2は7間×2間の南北棟である。SB-3は調査区西端で検出された、6間×2間の南北棟で、東側柱列の中央の柱間がやや広いつくりになっている。SB-8は、4

間×2間の南北棟である。SB-9は調査区北西隅で検出された東西棟で、南面庇がつき、東柱をもつ規模が大きい建物である。SA-1は、東西方向に14間以上延びる櫓（塀）である。柱穴の切り合いから、SA-1→SB-2→SB-1の変遷が確認できた。SB-3および8は、建物の軸方向よりSA-1に伴う可能性がある。SB-9は、柱列の一致を考えると、SB-1にともなうことが考えられる。

平安～鎌倉時代の建物群は4棟以上が確認できる。時期は出土した土師器・黒色土器等



作業風景



調査地位置図



調査区南から

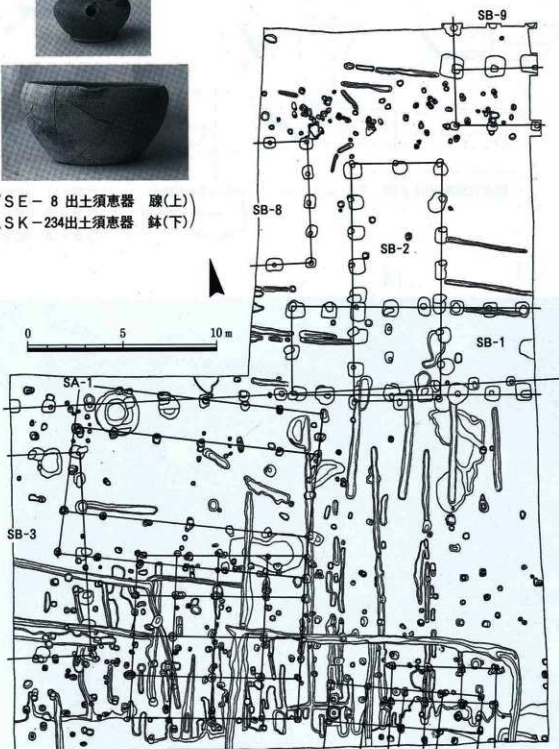
から、10世紀および12～13世紀のものである
 ということができる。

古代の建物群は、東西30mにおよぶ柵列な
 ど、高い企画性をもっていたということがで

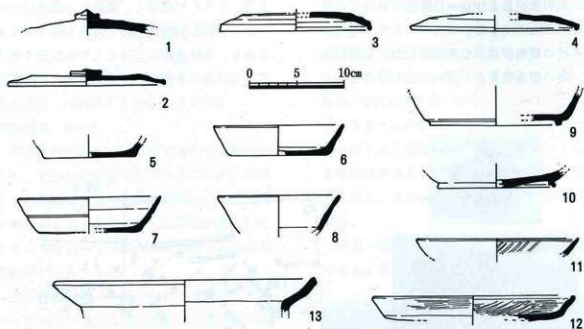
きる。こうした成果と、隣接した調査区でみ
 つかっている総柱建物等の存在もふくめて考
 えると、手原遺跡の官衙としての性格を考
 えていくべきであろう。(雨森)



(SE-8 出土須恵器 鉢(上))
 (SK-234 出土須恵器 鉢(下))

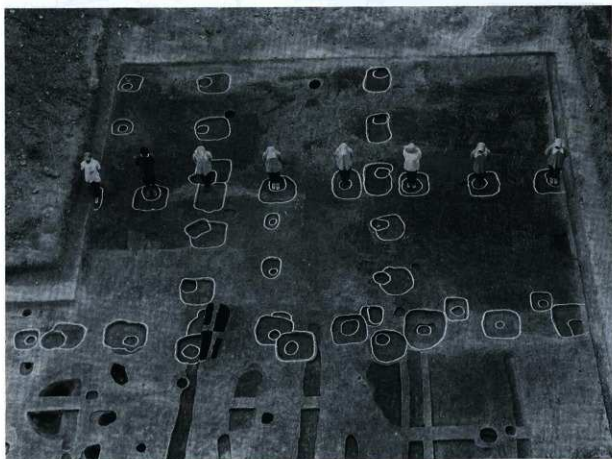


調査区遺構図

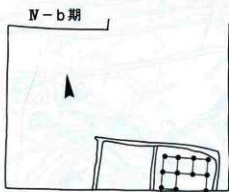
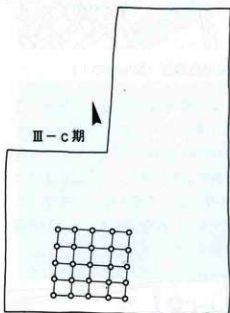
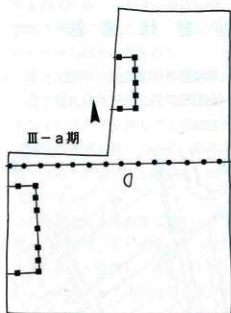
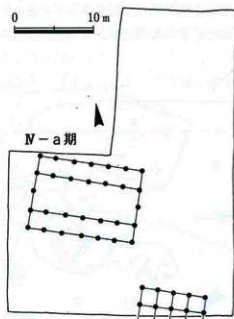
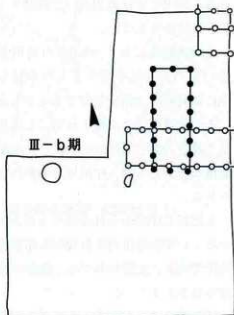
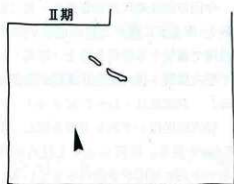


掘立柱建物出土土器

(5、6、13	SB-1	出土
(1~4、7~9、11	SB-2	出土
10、12	SB-3	出土



SB-1



遺構変遷図

⑩ 岩 畑 遺 跡

調 査 地 栗東町林字高丸310-3 他

調査期間 1995年5月22日～8月31日

調査面積 969㎡



調査地位置図(2500分の1)

岩畑遺跡は古墳時代以降、様々な遺構・遺物を遺す複合遺跡として周知されている。とりわけ古墳時代のそれは、河道を挟んで略東西に2つの集落が知られている。これまでに全体で約200棟を超える竪穴住居が確認されており隣接する辻、高野遺跡とともに大規模な集落群を形成している。

今回の調査地は東側集落の一角に位置し、耕土・床土下に拡がる暗灰色層をはぎ取った段階で露呈する黄灰色層上(標高:108.70m)で竪穴住居4棟や土坑状遺構が確認されている。

竪穴住居はいずれも方形を呈し、1辺5～5.5mを測る。床面には4主柱穴が見られ、その中央に地床炉が設けられている。通常見られる屋内土坑は東辺沿いに付設する1棟を除き、認められない。

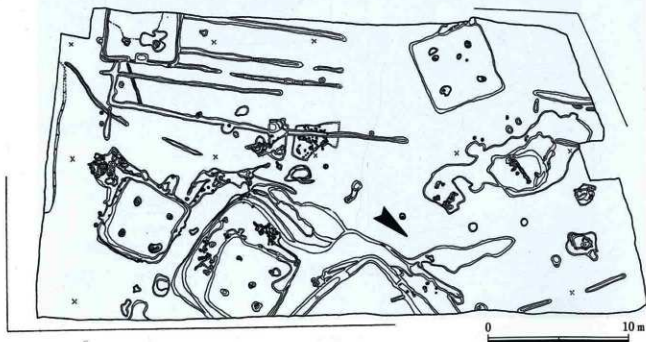
土坑状遺構には1～1.2mの楕円形状と一辺0.7mの方形状を呈するものが見られる。中には完形の土器を包含するものもある。

その他遺構には、幅1mで、L字形に屈折して延びる溝、径0.5mのピットの集中する遺構などがある他、中世以降の耕作痕も認められる。

上記竪穴住居からは多数の土器が出土している。いずれも庄内併行期から布留併行期の所産である。土器以外では、鉄鏝の出土があげられる。

岩畑遺跡では住居内より多数の鉄鏝が出土し、その特異性が注目されているが、今回も改めてそれを再確認させるものとなった。

(大崎)

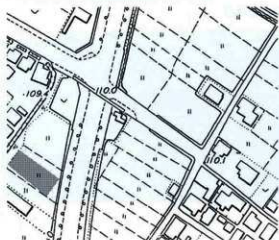


⑪ 岩 畑 遺 跡

調 査 地 栗東町林字高丸310-1 他

調査期間 1995年11月 6 日～11月30日

調査面積 370㎡



調査地位位置図 (2500分の1)

岩畑遺跡は隣接する辻、高野遺跡とともに野洲川左岸地域における代表的な古墳時代集落遺跡として知られている。これまでに約200棟を超える竪穴住居が確認され、略東西に2つの集落の拡がりが見えられている。

今回の調査地点はその境、河道の存在が想定されてきた区域にあたる。

調査は耕土・床土をはぎ取った段階で露呈

する黄灰色層上 (標高: 109.00m) で河道状窪地の西肩口を確認した。窪地内にはさらにいくつかの細流が見られた。

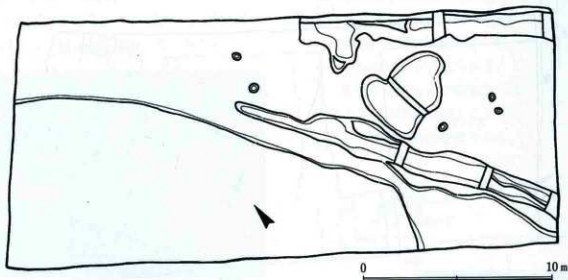
埋土の堆積状況は以下の通りである。

最上層には厚さ0.6mで暗灰色層が堆積し、オレンジベルトを挟んで下層には褐色層、茶褐色層が順次堆積している。細流は褐色層を切り込んで形成され、暗灰色、淡灰色層の埋土からなる。

出土遺物は暗灰色層上層から黒色土器、下層から須恵器 (TK48併行)、褐色層より小型壺 (古式土師器) が各々出土している。

以上の点から、この河道が周辺の集落を画するように拡がっていた蓋然性は高く、その拡がりを明確に捉えることが今後の課題と言えよう。

(大崎)



調査区全景

⑫ 高野遺跡

調査地 栗東町大字高野621-1 他

調査期間 1995年11月6日～12月4日

調査面積 515㎡

今回の調査は高野遺跡の北端部にあたる。隣接する区画整理の調査区では縄文時代から近世にいたる遺構・遺物が発見されている。本調査地で検出された遺構は、調査区東側に幅22m以上にわたって南-北方向に流れる中世の流路、流路に直交し東西方向に掘削された溝（SD-5）、流路が埋没した後に掘削された土抗（SK-03）、竹を編んだ枠をもつ井戸（SE-02）がみられる。

SE-02からは、泥面子（メンコの原型）が出土している。（雨森）

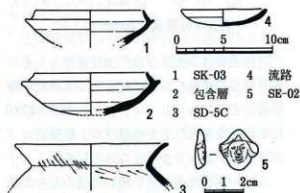


調査地位置図

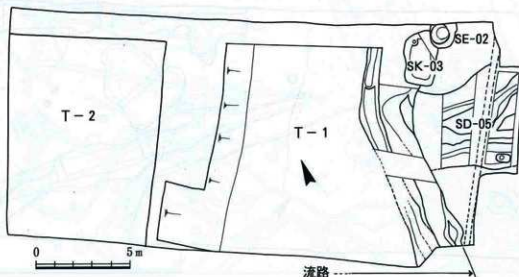
SE-02



▼調査風景



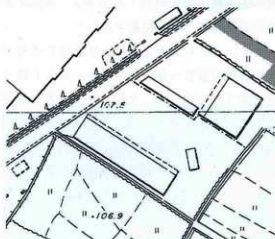
遺物実測図



調査地遺構図

⑬ 辻 遺 跡

調査地 栗東町辻字ボケ塚526-1
 調査期間 1996年1月22日～2月16日
 調査面積 325㎡



調査地位置図 (2500分の1)

辻遺跡は縄文時代前期以降、様々な時代の遺構・遺物を遺す複合遺跡として周知されている。なかでも古墳時代のそれは、300棟以上の竪穴住居がこれまでに知られている他、石製腕飾類工房の確認、韓式土器や初期須恵器の出土等も見られ、隣接する高野、岩畑遺跡とともに野洲川左岸を代表する大規模な集落群を形成している。

今回の調査地点は、辻遺跡中央を北流する河道左岸に広がる集落の一角にあたる。



竪穴住居 (SH-7)

調査では耕土、床土をはぎ取った段階で露呈する黄灰色層上 (標高: 105.90m) で竪穴住居等の遺構が確認された。調査区が限定されるため必ずしも全容は明らかでないが、以下にその概略を記述する。

竪穴住居 (SH) はいずれもその一部の確認にすぎないが、7棟の住居が見られる。その内、SH 1 は一辺5.2mの方形を測る。東辺にはかまどを付設し、その隅に円形状の屋内土坑を持つ。

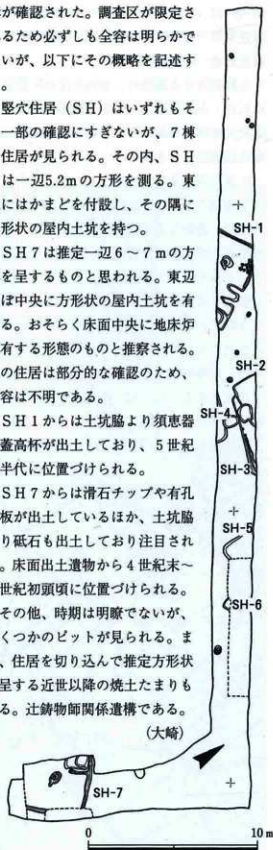
SH 7 は推定一辺6～7mの方形を呈するものと思われる。東辺ほぼ中央に方形の屋内土坑を有する。おそらく床面中央に地床炉を有する形態のものと推察される。他の住居は部分的な確認のため、内容は不明である。

SH 1 からは土坑脇より須恵器有蓋高杯が出土しており、5世紀後半代に位置づけられる。

SH 7 からは滑石チップや有孔円板が出土しているほか、土坑脇より砥石も出土しており注目される。床面出土遺物から4世紀末～5世紀初頭頃に位置づけられる。

その他、時期は明瞭でないが、いくつかのビットが見られる。また、住居を切り込んで推定方形を呈する近世以降の焼土たまりもある。辻鋳物師関係遺構である。

(大崎)



⑭ 辻 遺 跡

調 査 地 栗東町大字高野サルガウ他

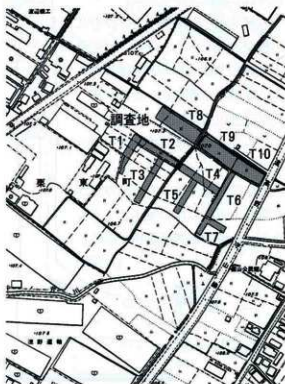
調査期間 1995年4月1日～1996年3月31日

調査面積 約5,300㎡

今回報告する調査は、1993年度から開始された辻・小坂西部土地区画整理事業に伴う第3次発掘調査の成果で、今年度の発掘対象地域は辻遺跡に含まれる。

区画整理事業に伴う第1次、第2次調査の主な成果としては、現段階では栗東町で最古の遺構・遺物となる縄文時代早期末もしくは前期前半頃の土坑が確認され、土器と供に炭化した木の実（大半がイチイガシを含むコナラ属かシイ類の一種）が多数出土した。また、平安時代の有力氏族の存在をにおわせる水辺の祭祀跡や、官衙や寺院等で発見されることの多い緑釉陶器の小壺（高さ7cm強）が出土し注目された。この他、縄文前期以降の地震跡（液状化跡）も確認されている。

今年度における遺構・遺物の時期区分は、



調査地位置図

先年度に引き続き1993年度に設定した以下に記述するⅠ～Ⅶ期区分を用いることにし、便宜上前半、後半を付けて記述する。Ⅰ期縄文時代、Ⅱ期古墳時代（4～6世紀）、Ⅲ期白鳳時代（7世紀）、Ⅳ期奈良時代（8世紀）、Ⅴ期平安～鎌倉時代（9～13世紀）、Ⅵ期室町～安土桃山時代（15～16世紀）、Ⅶ期江戸時代以降（17～20世紀前半）

(T1) トレンチ1では、Ⅱ期前半の堅穴住居3棟（SH-1、2、5）、同じく掘立柱建物2棟をはじめ、土坑、ピット等が確認されている。SH-1は、SH-2を切る堅穴住居で、ベッド状の施設（高床部）を持つ特異なものである。掘立柱建物は1間×1間のものと、2間×1間のものがある。この他、Ⅶ期の耕作痕や土坑等が確認されている。

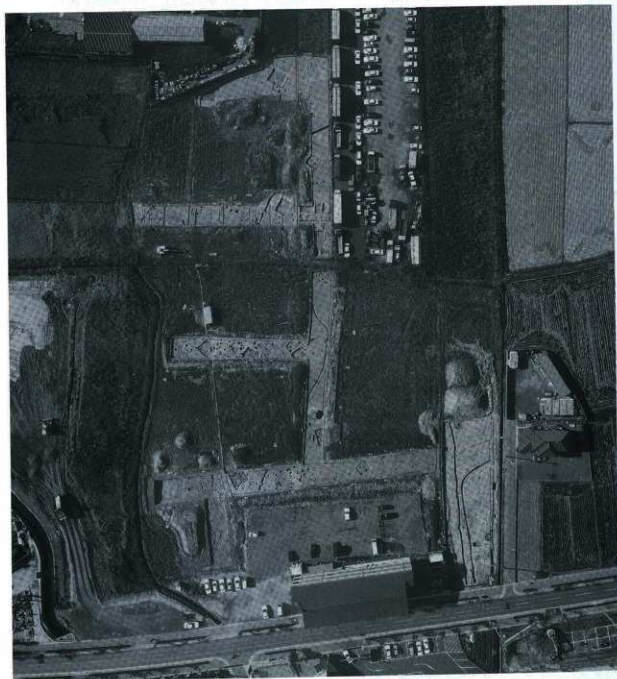
(T2) トレンチ2では、Ⅱ期前半の堅穴住居（SH-3）、溝（SD-201）、Ⅳ期後半もしくはⅤ期前半頃と考えられる櫓、掘立柱建物等が確認されている。SH-3は碧玉製玉造工房を兼ねており、住居構造は通常の4本主柱穴ではなく2本主柱穴で、平面プランも北西隅がやや丸くなり台形状に近い。南辺中央には土坑が存在し、その西側に工作ピットが存在する。工作ピットの床面からは、研ぎ汁と思われる白泥状沈殿物が存在した。玉造関連の遺物も南辺の土坑と工作ピット周辺から主に出土していることから、このあたりが作業空間であったことがいえる。また、中央やや北よりには炉が存在し、北東隅には、堯がつぶれた状態で出土していることから、玉造以外にも日常生活に使用されていたことが想定できる。SH-3の北側に存在するSD-201の上層からは碧玉製のチップをはじめ、碧玉製紡錘車形石製品や碧玉製筒形石製品の破片、滑石のチップや白玉等、多量の玉造関連遺物が土器と供に出土している。

(T3) トレンチ3では、Ⅱ期前半の堅穴状遺構（SH-4）、土坑（SX-301）、溝（SD-301）、Ⅳ～Ⅴ期の掘立柱建物4棟に

上、Ⅶ期のL字状の溝、耕作痕等が確認されている。SH-4およびSD-301では祭祀行為をしていたと思われる跡が確認されている。SH-4の上層面では、滑石製勾玉や滑石製白玉が土器と共に廃棄されており、そのすぐ西隣に存在するSD-301では、甕2個を並列し、少し離れて高杯と鉢が規則的に供献されていた。またSX-301では、鉄滓が出土している。

(T4) トレンチ4では、Ⅱ期前半の竪穴

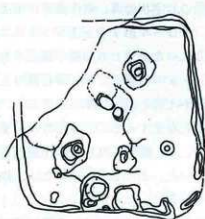
住居(SH-12)1棟、土坑(SX-401、402、403)、Ⅳ期の土坑、Ⅳ期もしくはⅤ期の井戸が確認されている。SX-401、402、403は溝状にやや細長い土坑で、いずれの遺構からも玉造関連の遺物が出土している。特にSX-401では、底付近に5~10cmほどの石が並べてあったような跡がみられ、埋土中に石釧片が存在したことから単なる土坑ではなく、何らかの意味を持つ遺構であった可能性を考えておきたい。また、3つの土坑配置



1995年度調査区上空より



T2・SH-3 (1号工房)



T5・SH-9 (2号工房)

関係からもそのことが伺える。SH-12は、一辺約5.4mの竪穴住居で、南辺中央に土坑をもつ。また住居床面各所には、柱材や壁材が炭化して残っていたことから焼失した住居と思われる。Ⅶ期の井戸は、長径2.9mの掘り方をもち、深さ2.1m以上に達する。底には竹で組んだ枠が2つ存在した。主にかんばつ用に使われていたものであろう。

(T5) トレンチ5では、Ⅱ期の竪穴住居6棟 (SH-6、7、9、10、11、17) とⅡ期もしくはⅢ期の竪穴住居 (SH-8) をはじめ、Ⅳ期～Ⅴ期の掘立柱建物5棟以上、Ⅳ期の土坑、Ⅱ期～Ⅶ期の旧河道、耕作痕等が確認されている。Ⅱ期の竪穴住居は炉をもつものがほとんどであるが、SH-10のみは北辺中央にカマドをもち外側に煙道が張り出している。SH-9は、SH-3同様に碧玉製玉造工房を兼ねている。平面プランは南東がやや張り出し台形に近い。全体を掘っていないため明確に判断できないが、2本主柱穴ではなく4本主柱穴の可能性が高い。南辺には周囲に石敷をもつ土坑が存在し、その東側に浅い土坑が存在する。このあたりを中心に玉造関連の遺物が出土している。尚SH-9の下層からは、T4・SX-401から出土している石銅片と同一個体と思われる破片が出土している。

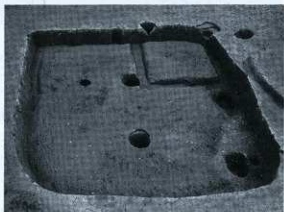
(T6) トレンチ6では、Ⅱ期前半の竪穴住居3棟 (SH-14、15、16)、Ⅲ期の竪穴



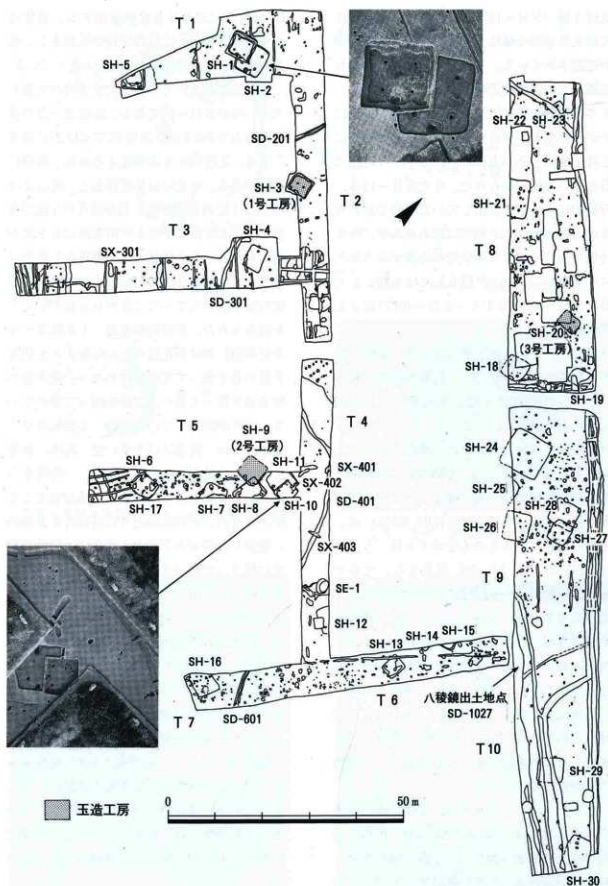
T3・SD-301 供献土器出土状況



T5・SH-9 (2号工房)



T2・SH-3 (1号工房)



調査地遺構図

住居1棟(SH-13)をはじめ、Ⅳ期～Ⅴ期の掘立柱建物4棟以上、溝、Ⅵ期の耕作痕等が確認されている。SH-14、15は部分的な確認のため詳細は不明である。SH-16は、4本主柱穴をもつ方形プランの住居で中央に炉が存在する。東辺中央には、住居廃絶後に土坑を埋め、その上に1.1m×1.2mの範囲で石を敷いた跡がみられた。またSH-13は、時期的にカマドを使用していた住居と思われるが、明確なカマドの跡は認められず、中央付近の土坑に焼土と炭化物の堆積がみられたにすぎない。一方、Ⅳ期もしくはⅤ期とした溝(SD-601)はT4・SD-401の続きと思われる。

(T7) トレンチ7では、Ⅳ期～Ⅴ期の溝(SD-702)、土坑、ピット等が確認されている。SD-702からは、滑石製勾玉の未製品が出土している。

(T8) トレンチ8では、Ⅵ期の土採り土坑が多く存在するため、Ⅱ期の堅穴住居やⅤ期の掘立柱建物が一部の確認にとどまる所が多くみられる。Ⅱ期の堅穴住居(建物)は、その可能性があるものも含めて6棟(SH-18、19、20、21、22、23)存在する。なかでもSH-21は、一辺が約7.8mで大型住居の部類に含まれる。SH-20とした堅穴住居は明確な主柱穴が存在せず、壁溝も存在しない。南東隅の土坑や床面付近で碧玉製の玉造未製品が出土したことから、堅穴の構造も考慮して玉造工房と考えておきたい。またSH-23は一辺約2.5mほどの小型の堅穴建物で、住居というより納屋のような性格をもった建物の可能性が考えられる。

(T9) トレンチ9では、Ⅱ期の堅穴住居5棟(SH-24、25、26、27、28)、Ⅳ期～Ⅴ期の掘立柱建物5棟以上、Ⅴ期～Ⅵ期の溝、耕作痕等が確認されている。SH-27は西辺ほぼ中央にカマドをもち、袖部分は崩壊してかろうじて埋土との区別ができる程度である。主柱穴は4本構造で周囲に壁溝が巡り、東辺

には約1.2×1.8mの土坑が存在する。遺物はカマド周辺を中心にほぼ全体から出土し、南辺中央よりでは滑石製の白玉が出土している。一方今回確認されている堅穴住居の中で最も大きいのがSH-24である。規模は一辺の長さが最大で約8.8m、面積約77㎡以上に復元できる。主柱穴は4本構造と思われ、周囲に壁溝が巡る。中央には炉が存在し、南辺ほぼ中央には仕切り溝を伴う二段掘りの土坑が存在する。北辺ほぼ中央とその東側にも土坑が認められる。この住居では、廃絶から完全に埋まってしまうまでの100年以上の間に、祭祀行為が行われていたと思われる跡がいくつか認められた。住居廃絶直後(3世紀末～4世紀初頭)には、北辺中央に存在した土坑を多量の石を使って完全に埋めたり、北西側の柱を抜き取った後に、土器を割って埋めている。住居が埋まっていく段階(4世紀前半～中頃)では、西辺ほぼ中央に甕、高杯、鉢等を供献した跡がみられる。また、一部埋まった住居に土坑を新たに掘削して廃棄場とした跡がみられ、その床面近くに石銅片を意図的に廃棄した跡がみられた。さらに、住居が完全に埋まった後(5世紀前半頃)に径約20cm、深さ約15cmの小さなピットを掘り、滑石製の白玉10個を入れたミニチュアの壺(高さ5.3cm、口径3.6cm)を埋納した跡が確認された。

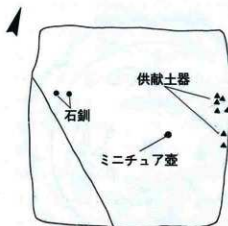
(T10) トレンチ10では、Ⅱ期前半の堅穴住居2棟(SH-29、30)、Ⅴ期の櫓列、Ⅴ期～Ⅵ期の溝等が確認されている。堅穴住居はいずれも削平を受けて残存状態が悪い。この内SH-30は、一辺が約7.8mの規模をもちSH-21、24同様大型住居の部類に含まれる。この他、Ⅵ期の井戸が2基確認されている。また遺物では、西側トレンチ沿いに確認されているⅤ期の溝から八稜鏡が出土している。

(下層遺構)

下層の遺構・遺物は、主にT1の南西、T2とT3が接する付近から南西にかけての部



T9・SH-24 遺構図



T9・SH-24 祭祀の地点略図



T9・SH-24出土 ミニチュア壺と白玉



T9・SH-24柱穴 土器出土状況



T9・SH-24 供献土器出土状況

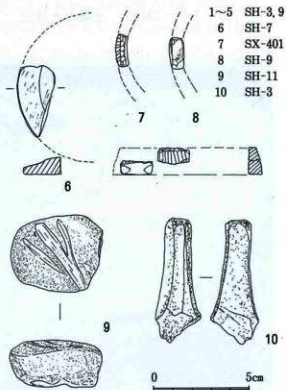
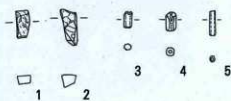


T9・SH-24 石敷土坑と集石土坑



T10・SD-1027出土八稜鏡

T10・SD-1027出土八稜鏡拓影



玉造関連遺物



玉造関連遺物



碧玉および滑石のチップ・砥石

分と、T4とT5が接する付近から西側にかけての部分にみられた。遺構としては、竪穴住居1棟、落ち込み以外は明確な遺構としてはとらえられず、土器が集中している部分（土器溜め）としか判断できない。竪穴住居はT2とT3にまたがって確認されている。規模は長径5.7m、短径3.9mの楕円形プランをもつ。柱穴は住居の周り（壁際）に存在し、確認できたもので7箇所存在する。中央付近から南側にかけて特に焼土まじりの土が認められ、住居外の南西にも焼土を含むピットが存在する。また南隅のピット内および周辺から、5cm以上のサヌカイト片が5個集中して出土した。これらの遺構の時期は、出土した土器から判断すると縄文時代後期後半頃の所産と考えられる。また遺構は認められなかったが、T8およびT9で縄文時代晩期の突帯文土器が1点ずつ出土している。

第3次調査における大きな成果は、Ⅱ期前半（4世紀末～5世紀初頭）の碧玉製玉造関

連の工房が3棟確認できたことである。工房からは石釧や紡錘車形石製品等が出土していることから、玉以外の製品も製作していた可能性が考えられる。しかしこれらの遺物には、仕上げ段階もしくは完成された遺物の破片である可能性が高いことや、石釧や紡錘車形石製品の一部には、割れ口にミガキや打烈した痕跡が認められることから、管玉用に再利用されていた可能性が考えられる。しかし、栗東町の安養寺山周辺に分布する円墳3基（下味古墳、毛刈古墳、山ノ上古墳）からは、合計6個（破片も含む）の石釧が出土している他、野洲川左岸流域には、野洲川左岸遺跡（野洲町）や下長遺跡（守山市）のように古墳以外の集落遺跡から石釧が出土している事実を今後どのように理解していくのか、大和政権との関わりはどのようなか等、辻遺跡から出土した碧玉製品のもつ意味は、今後古墳時代の社会を考える上で重要な資料である。

（近藤）



T3下層・縄文時代の竪穴住居

国庫補助事業・町事業 埋蔵文化財発掘調査

95年度国庫補助事業調査

遺跡調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
15 小 柿 小柿字樋ノ口304-2 他	宅地造成	竪穴住居・溝状土坑(古)	弥生土器	56	大崎

95年度町事業調査

遺跡調査地	原因	遺構	遺物	頁	担当
16 和田古墳群 下戸山47	古墳公園	横穴式石室の裏込めの確認(古)	須恵器	57	佐伯

遺構表では、下記の略号を用いた。

(縄) 縄文時代、(弥) 弥生時代、(古) 古墳時代、(飛) 飛鳥時代、(白) 白鳳時代
(奈) 奈良時代、(平) 平安時代、(鎌) 鎌倉時代、(室) 室町時代、(江) 江戸時代
また、時代が特定できない場合は(中) 中世、(近) 近世などと表すことがある。

⑮ 小 柿 遺 跡

調 査 地 栗東町大字小柿字樋ノ口304-2他

調査期間 1995年2月7日～2月28日

調査面積 350㎡



調査地位置図

小柿遺跡は縄文時代晩期以降、様々な時代の遺構・遺物を遺す複合遺跡として周知されている。中でも弥生時代後期後半のそれは隣接する下鉤遺跡、中沢遺跡とともに葉山川流域の拠点的な集落群を形成している。

今回の調査では、耕土・床土下に広がる褐灰色層をはぎ取った段階で露呈する褐黄灰色層上（標高：97.30m）で竪穴住居や多数の

土坑状遺構等が確認された。

竪穴住居は方形を呈し、南辺沿いに方形土坑を有する。土坑状遺構は楕円形状を呈するものが大半である。

いずれも弥生時代後期後半の土器が多数出土している。

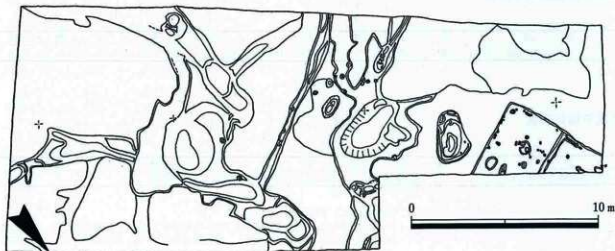
(大崎)



竪穴住居跡



土 坑



⑯ 和田古墳群

調査地 栗東町大字下戸山47-1 他

調査期間 1995年8月18日～9月5日

調査面積 100㎡



調査地位置図

和田古墳群の発掘調査は古墳群の整備、保存を目的として安養寺山古墳群調査整備委員会により1992年8月から1993年12月の期間、2,800㎡の面積で実施した。古墳群は独立丘陵安養寺山の西麓尾根標高117m～127mに分布する9基から成る後期群集墳である。

今回の調査は5号墳石室覆屋施工に先立ち、石室石材の裏込め部分の状態を把握するために実施した。

5号室は11×7mの楕円形の墳丘長軸中央に玄室長2.9m、幅1.2m。羨道長1.4m、幅0.9mの石室を構築している。裏込め部分の調査は、基底石を含め4段残る石材の2段分を露出させ平面図を作成し、さらに奥壁と玄室中央部、羨道部の両側を墳丘地山面まで立ち割り、断面図を作成した。裏込め石材は見られず、10～20cm単位で埋め戻しが行われていた。

なお本調査の時に設けていた畦を取り壊したところ周溝底部より図示した須恵器群が出土した。

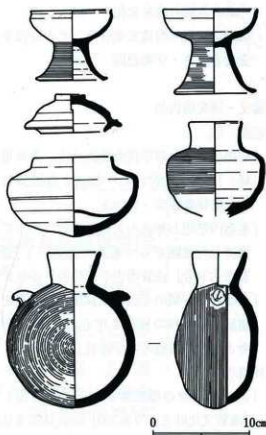
(佐伯)



5号墳 (北から)



西側側壁裏込め



出土遺物実測図

職員の活動記録

○研究会等での発表活動

近藤 広

- ・第68回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
辻遺跡 1996.3.8

雨森智美

- ・第68回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
手原遺跡 1996.3.8

佐伯英樹

- ・前方後方墳プレシンボ、考古学フォーラム
定例会「弥生時代における野洲川流域
の墓制」(愛知県・共同) 1995.10.14
- ・考古学研究会関西例会「近江の大型掘立
柱建物を考えるーその調査事例と考察ー」
1995.11.18

- ・(財)滋賀県文化財保護協会 設立25周年記
念企画・いにしへの渡り人 シンポジウ
ム『近江の渡来文化』
「湖南地域の渡来文化」 1996.2.18
- ・第68回滋賀県埋蔵文化財センター研究会
安養寺遺跡・伊勢遺跡 1996.3.8

○論文・研究報告他

近藤 広

- 「類例の少ない斎串状斎祀具出土 高野遺
跡」『滋賀文化財だよりNo.209』(財)滋賀県
文化財保護協会 1995.5
- 「集落内祭祀と集落の企画性ー近江の独立
棟持柱付建物をもち集落の検討ー」『滋
賀考古14号』滋賀考古学研究会 1995.8
- 「布留式並行期の受口状口縁壺ー辻・高野
遺跡出土資料の検討を中心にー」『滋賀
考古15号』滋賀考古学研究会 1996.3

雨森智美

- 「13~14世紀の屋敷跡が出土 縄遺跡」
『滋賀文化財だよりNo.209』(財)滋賀県文化
財保護協会 1995.5
- 「手原遺跡と古代の地方官衙」『近江歴史・

考古論集』畑中誠治先生退院記念論文集
刊行会 1996.3

「郡衙ー栗東町岡遺跡」『滋賀文化財教室
シリーズ155』(財)滋賀県文化財保護協会
1995.12

佐伯英樹

「弥生時代後期の大型掘立柱建物跡 野尻
遺跡」『滋賀文化財だよりNo.209』(財)滋賀
県文化財保護協会 1995.5
「[霊仙寺] 推定地を調査 霊仙寺遺跡」
『同上』同上 1995.5

藤岡英礼

『定本・和歌山の城』(共著) 郷土出版社
1995.7

誤

正



調査地位置図

⑮ 小柿遺跡 56ページ

発行日 1996年9月1日
 編集・発行 (財)栗東町文化体育振興事業団
 埋蔵文化財調査課
 滋賀県栗太郡栗東町大字戸山47番地 〒520-30
 栗東町出土文化財センター内
 TEL 0775-53-3359 FAX 0775-53-3514
 印刷・製本 (株)スマイ印刷工業
 滋賀県栗太郡栗東町大字川辺568-2 〒520-30
 TEL 0775-52-1045 (代)